

小グループ会合で提起された論点の整理

論点1：セイヨウオオマルハナバチの目撃場所は道路沿い等開発が進んでいる場所に限定されており、今後国立公園内へ分布を拡大しないのではないか。

保全の対象とすべき自然環境は、国立公園の特別保護地区等の原生的な自然環境に限定されない。

ただし、セイヨウオオマルハナバチの分布は、既に我が国の固有で貴重な生態系を有する地域にまで迫っており、これらの地域に対する予防的な観点からの対応も必要な状況である。

表1 国立公園付近及び原生的な自然環境におけるセイヨウオオマルハナバチの確認事例

図1 1996年～2005年の間にセイヨウオオマルハナバチが野外で確認された市町村

論点2：詳細な調査が行われた鶴川町二宮地区においては、餌資源が豊富にあることから在来種が移動しただけで、在来種が駆逐されたとはいえないのではないか。

鶴川町において、セイヨウオオマルハナバチの増加と、在来のマルハナバチ類の減少の著しい傾向が確認されていることから、セイヨウオオマルハナバチと在来のマルハナバチ類が競合し、在来種が駆逐されていると推察できる。

なお、同一の巣穴から複数のセイヨウオオマルハナバチの死体が確認されている事例が増加していることが確認されており、営巣場所をめぐる競合が発生している。

図2 調査におけるセイヨウオオマルハナバチと在来のマルハナバチの確認数の変化

表2 鶴川町におけるセイヨウオオマルハナバチの巣穴の調査結果

論点3：エゾエンゴサクは多年草であり、かつ北海道に広く分布している植物である。また、訪花する昆虫もマルハナバチだけとは限らないことから、単純にセイヨウオオマルハナバチの盗蜜によって結果率が下がったことをもって、エゾエンゴサクの存続に重大な影響があるとは言えないのではないか。

エゾエンゴサクは、ほとんど栄養繁殖を行わず、種子繁殖に依存して植物群落を維持していると考えられている。多年草であるため、調査を行っている短期間で群落が消滅するほどの影響は確認されていないが、訪花昆虫のほとんどがセイヨウオオマルハナバチ又は在来のマルハナバチであったことが確認されている。

また、セイヨウオオマルハナバチの訪花頻度が高い場合、エゾエンゴサクの結果率が有意に低くなることから、経年的には重大な影響をもたらす可能性が高い。

図3 エゾエンゴサクへの訪花昆虫の比率